様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２２９３

研究課題名（和文）平安朝和歌序の注釈と研究

研究課題名（英文）Annotations and studies of the Heian period waka prefaces

研究代表者
山本　真由子（YAMAMOTO, Mayuko）

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：００７８４９０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、平安朝の和歌序を注釈し、その特質と意義とを明らかにすることであった。和歌序とは、和歌制作の背景となる状況を記した短い文章である。和歌序は、漢文と和文（仮名文）の作品が残り、書序（一書の序）、宴集の序、定数歌の序に区分される。
本研究では、まず、宴集の和歌序が多く制作された場所で、序の表現の典故が継承されていることを明らかにした。また、和歌序は、奈良朝から平安朝にかけて、和歌と漢詩との関係が変化する過程を示す、重要な資料であることを指摘した。さらに、菅原文時、慶滋為政の序の特質を検討した。
加えて、著書『平安朝の序と詩歌ー宴集文学攷ー』（塙書房・2021年2月）を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
平安朝を通して、漢文あるいは和文で書かれた和歌序を総合的に検討し、平安朝の和歌序の特質と変遷と、平安朝文学における和歌序の意義の一端を明らかにしたことである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to annotate the Heian period wakajo (waka prefaces), and to clarify its characteristics and significance. The wakajo is a short writing that describes the background of waka production.
In this study, it was first clarified that the authority for the expression of the foreword was inherited in the place where many wakajo for the banquet were produced. It was also pointed out that the wakajo is an important material that shows the process of changing the relationship between Waka and Chinese poetry from the Nara period to the Heian period. Furthermore, we considered the characteristics of the introduction of Sugawara no Fumitoki in the middle of the 10th century, which is contained in "Honcho Monzui", in comparison with the introduction of Minamoto no Shitago;, who was active at the same time. In addition, I published a book "Heian period prefaces and Chinese and Japanese poetry-a discussion of banquet literature" (Hanawa Shobo;, March 2021).

研究分野：日本文学

キーワード：本朝文粋　書序　真名序　仮名序　宴集　菅原文時　源順　慶滋為政

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
（１）和歌序の「序」とは序文、前書きをいう。中国文学では、梁の『文選』に序の部類があり、その中には一書の序「書序」や、宴集で詠まれた詩群に冠せられた「詩序」がある。これらの序は、今日一般にいう序文とは異なり、それだけで独立して鑑賞し得る文章である。日本では、中国文学の序を受容して、奈良朝において制作されるようになった。さらに、「詩序」から、漢文の和歌序「真名序」が生まれた。現存する平安朝の和歌序で、制作年代が最も遡るのは、寛平年間（889―897）の書序と考えられる。宴集の序としては、延喜年間（901―923）頃の真名序が残る。また、同じ頃、和文の和歌序「仮名序」が作られるようになった。村上朝の末頃から花山朝にかけて（960―986 頃）、河原院の安法法師のもとに集った歌人達が、定数歌の序も含めて仮名序を多く残す。現存の和歌序は、後一条朝（1016―1036）以後に急激に増加する。その多くが、宴集の真名序である。院政期には、真名序を集成した書『扶桑古文集』などが編まれた。
（２）真名序については、夙に大曾根章介氏「和歌序小考」（1988 年）が文章構造を論じる。後藤昭雄氏「和歌真名序考」（1990 年）は、和歌史を補完する資料としての可能性を論じる。近年は、和歌序の注釈が進められているが、十分とは言い難い。佐藤道生氏「『扶桑古文集』訳注（抜萃）」（2002 年）に 9 篇、後藤昭雄氏『本朝文粋抄三』（2014 年）には 5 篇の注釈が収められる。
（３）研究代表者は本研究の開始当初まで、平安朝の宴集において制作された序と漢詩・和歌の表現について、成り立ち、特質を明らかにすることを目的として研究を進めていた。その結果、詩序との関わりが、和歌序の展開の諸相に影響していることが明らかになっていた。また、和歌序が、物語など他のジャンルの作品へ影響を与えた可能性が示されていた。

２．研究の目的
（１）本研究の目的は、個々の和歌序を、漢文学と和文学双方の作品の用例をふまえて、詳細に注釈することである。また、それらの注釈をふまえて、平安朝の和歌序の特質を考えることである。
（２）さらに、序と和歌とはどのように関わるのか、平安朝を通して和歌序はどのように展開したのか、他のジャンルの文学作品とはどのように関わるのかを検討し、平安朝文学における和歌序の意義を明らかにすることである。

３．研究の方法
（１）平安朝の和歌序を収載する資料を調査、収集、整理する。
（２）和歌序本文の異同を調べ、必要があれば校訂する。和歌序は、伝本が複数ある場合のほか、複数の書に収載される場合がある。
（３）和歌序を、漢文学と和文学双方の表現をふまえて注釈する。注釈の際は、典故や用例を踏まえて厳密に語釈をし、語釈をふまえて解釈する。解題的研究（和歌の有無、作者、歌会の開催年時、参加者、場所など）を併せて行う。
（４）序と和歌とはどのように関わるのか、平安朝を通して和歌序はどのように展開したのか、他のジャンルの文学作品とはどのように関わるのかを考察し、平安朝文学における和歌序の意義を明らかにする。

４．研究成果
（１）2018 年度は、「平安朝の大堰川における漢故事の継承」で、多くの和歌序が制作された場所における、表現の典拠となった漢故事の継承について明らかにした。平安朝の和歌序を収集、整理したところ、『本朝文粋』『本朝続文粋』など、複数の資料に、平安京の郊外の大堰川で作られた漢文の和歌序が伝存していた。これらの和歌序には、共通して「紅葉」の表現が見られる。この「紅葉」の表現の典拠は、延喜七年（907）の宇多法皇の大堰川行幸の漢詩と和歌の題「紅葉落」と、紀貫之の和歌序だと考えられることを論じた。
（２）「和歌と漢詩―平安朝における実例をめぐって―」では、奈良朝から平安朝にかけての和歌と漢詩との関係が変遷する過程を検討するため、和歌序を取り上げた。特に『新撰萬葉集』の書序について、先行研究を整理し、宇多朝の和歌の状況を明らかにした。
（３）2019 年度は、昨年度に引き続き、平安朝の和歌序を収載する資料の諸本を調査、収集し、

整理を進めた。『朝野群載』、『本朝文集』、歌合巻を対象とした。加えて、主にこれまでに発表した論文をまとめて、平安朝の宴集で制作された序と漢詩や和歌について論ずる著書刊行の用意をした。本書では、和歌序に加えて、漢詩の序である詩序についても考証する。序説を書き下ろし、既発表の原稿についても、考察の対象とする序に新たに大意を付すなど加筆を施した。

（４）「慶滋為政の和歌序-摂関期の和歌序の特質-」において、摂関政治の最盛期に活躍した文人官僚の漢文と和文の和歌序２篇を取り上げて、その特質を指摘した。為政の漢文の序は『扶桑古文集』に、和文の序は歌会資料および『栄花物語』と仮名序を集成した書とに収められている。和文の序については、本文を校訂して示した。漢文の序は、藤原道長が主宰する小一条院の遊覧において作られた。和文の序は、高陽院行幸の後宴において書かれたもので、よく知られた作品である。

（５）2020 年度は、著書『平安朝の序と詩歌―宴集文学攷―』（塙書房・2021 年 2 月）を刊行した。同書では、平安朝の宴集において制作された序と漢詩や和歌の表現の成り立ちや特質を明らかにすることを主な目的として、特に序を軸として論じた。序としては、和歌序に加えて、漢詩の序である詩序も取り上げている。Ⅰ「和歌序と詩歌」では、源順や源道済の和歌序について、その特徴を明らかにした。また、村上朝の末頃から花山朝にかけて（960―986 年頃）、河原院に集った歌人達によって書かれた仮名文の和歌序を集成し本文を校訂した上で、その特質や意義を考察した。Ⅱ「詩序と詩歌」では、源順とその後進の手に成る詩序の表現について、詩題や典故との関係を検討した。Ⅲ「序の展開」では、序と他のジャンルの作品、歌合の仮名日記や物語文学との関わりを論じている。

（６）2021 年度は、『本朝文粋』に、和歌真名序１篇、詩序６篇の作品が残る、菅原文時（899―981）の序の特質を、文時と同時代に活動した源順（911―983）の序と比較して考察した。併せて、文時に関する話が多い『江談抄』などの説話集における序についての記述を収集し分析を進めた。その結果、和歌序の漢文あるいは和文の選択は意識的になされていたと考えられる。また、従来の研究では、文時が詩句を題とする「句題詩」の規則を案出したことと関わって、平安後期の詩序の形式までも創始したと推定されてきた。しかし、『本朝文粋』に収められた順の詩序 17 篇を見てゆくと、天暦７年（953）以前の学生の時の作品から、「句題詩」の規則に従って、詩題に関わる段を為すものがある。『江談抄』には文時と順との作品の贈答が記される。平安後期に典型となる詩序の形式は、作者間の交流の中で形成された可能性があると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 山本真由子	４．巻 1
２．論文標題 慶滋為政の和歌序-摂関期の和歌序の特質-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 二〇一九年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書　文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本真由子	４．巻 1
２．論文標題 和歌と漢詩－平安朝における実例をめぐって－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書　日本文学を世界文学として読む	６．最初と最後の頁 44-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本真由子	４．巻 223
２．論文標題 平安朝の大堰川における漢故事の継承	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アジア遊学223日本人と中国故事　変奏する知の世界	６．最初と最後の頁 167-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本真由子	４．巻 62
２．論文標題 菅原文時と源順―『本朝文粋』巻十「花光水上浮」詩序を中心に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文学史研究	６．最初と最後の頁 8-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 山本真由子
２．発表標題 菅原文時の詩序と和歌序
３．学会等名 第65回国際東方学者会議SymposiumⅡ平安朝漢文学における散文の諸相（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 山本 真由子	４．発行年 2021年
２．出版社 塙書房	５．総ページ数 334
３．書名 平安朝の序と詩歌　－宴集文学攷－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関